

AD ALTIORA SEMPER

神戸市外国語大学図書館報 第25号

Contents:

サロンの読書机	小特集 図書館の「何？」 館内整理と蔵書点検
イエール大学とその図書館	小特集 図書館の「何？」 OPAC 質問票
単純作業に耐えられますか？	図書館日誌
蔵書点検アルバイト体験記	編集後記

サロンの読書机

村上 信一郎

フィレンツェで一年間暮らした。ちょうど三十年ぶりのイタリア暮らし。といってもそのときはローマ。似ているのは、どちらも街中で暮らしたことだけである。ローマでは下宿からパンテオンにもトレビの泉にも五分とかからなかった。今回、フィレンツェでは、ポンテ・ヴェッキオとウッフィッツィ美術館のあいだ、アルノ河右岸に面するルンガルノ・アルキブジェーリに居を定めた。ヴァザーリの回廊に面した通である。そこにはかつて火縄銃を売る店舗が建ち並んでいたことから、そんな地名が生まれたときく。

私が暮らしたのは、一四九五年に建てられたルネサンス時代の建築で、パラッツォ・デ・ジローラミという。もっとも第二次世界大戦末期、ナチ・ドイツ占領軍が撤退する時に、地雷を仕掛けてアルノ河畔を破壊してしまったために、この建物もその後再建されたもので、オリジナルなものではない。ちなみにジローラミというのはフィレンツェ司教を出したこともある名門貴族の名前である。だが私の家主のジョヴァンナ・ピアンキ夫人は、ジローラミ家とはもはや何のゆかりもない。ここでフィレンツェ有数の毛皮

商を営んでいた富裕な商人ブルジョワジ
ーの孫娘である。この建物の右端にある
ホテルは、イギリスの作家E・M・フォ
スターの小説『眺めのいい部屋』が映画
化されたときの舞台となったことで知ら
れている。しかし私の部屋はアルノ河の
反対側の裏小路に面していて、向かいの
家の赤い屋根瓦と、そこに生えた雑草を
ついでむ鳩の姿しか見えなかったのでは
あるが。

ビアンキ夫人のお宅は、私の部屋とは
違って、アルノ河も眼下に見えるし、私
の大好きなサン・ミニアート・アル・モ
ンテの教会も遠くに見ることができる。
また北側の窓辺に立つとパラッツォ・ヴ
ェッキオがまん前にある。彼女の寝室は、
かつてはジローラミ家の礼拝室のあった
ところで、天井には半円形のドームが残
っている。またいたるところに著名な風
景画家であった彼女の母親の絵が飾られ
ている。天井が高くて日当たりもよく、趣
味のよい落ち着いた家具調度がしつらえ
られた、とても居心地のよいサロン。も
う八十歳になるというのに、花柄のブラ
ウスとパンツ・ルックがよく似合うスリ
ムで魅力的なビアンキ夫人にぴったりの
部屋である。余計なことだが、彼女には
弁護士のジャンピエーロさんというボー
イフレンドもいる。アドリア海の別荘に
はいつも彼と一緒にいく。

ビアンキ夫人のサロンで印象に残って
いるのは、そこに三種類の机がしつらえ
られていたことである。一つはソファー
のまえの大きなテーブル。もう一つは電
話が置かれた事務机。といっても無料な
金属製のものではない。木目込み細工が
ほどこされたシックなデザインのビュー
ローである。家賃をもっていったときな
どは、そこで領収書を書いてもらったり
する。そして三つ目が窓辺の読書机であ
る。サイズは教室の机ぐらいか。ただ、
それよりも少し高さがある。要は書き物
をするための机ではないのだ。ビアンキ
夫人はよく詩のコピーをくれた。最初は
プリモ・レーヴィの「ヒロシマの女の子
のことなど何も残ってはいない」だった。
その返事を渡すと、次はサルヴァトー
レ・クワジモの「我らの時代の人間」。
まるで往復書簡のようなやりとりが続く
ようになった。そんなことからイタリア
語で詩を朗読してあげよう、といってく
れた。読書机に詩集をおき、そのまえに
先生と生徒よろしく二人並んでちょこん
と座るのである。彼女の後に続いて私も
詩を朗読していく。政治学を学ぶことに
少し疲れをおぼえていた私には、至福の
ひとときであった。

(むらかみ しんいちろう 本学教授)

イエール大学とその図書館

2004年春、イエール大学医学部に研究留学する夫とともに、新米主婦としてこの大学街にやって来ました。初めてのアメリカ生活は不安も多かったのですが、少しずつ慣れてきて、今では家事の合間に大学付属の美術館や博物館を見学したり、学内で催されるコンサート、映画会、講演会、演劇など、一般にも公開されている行事を楽しむようになりました。日本が恋しくなるときには、日本の新聞や書籍を求めて大学図書館へ行き、書庫に何棚も並ぶ日本語の本に囲まれて、ゆっくりと本を選びます。

イエール大学は、アメリカ北東部のコネチカット州にある港湾都市ニューヘイブンに位置し、4年制大学に加えて、人文理工系大学院、専門大学院（医学、神学、法学、芸術、音楽、林学・環境学、看護、演劇、建築、経営）から構成される総合大学です。創立は1701年、アメリカの伝統的な私立大学として知られています。現在の学生数は約11,000名です。4年制大学は、英国のオックスフォード大学やケンブリッジ大学を規範としたカレッジ制度を取り入れ、学生は約450名ずつ12の共同体（カレッジ）に分かれます。各カレッジには、食堂、図書室、娯楽室、セミナー室などが備えられていて、カレッジの最高責任者であるマスター、学業の助言をするディーン、そして多く

の教授が、学生たちと寝食をともにしています。大学の建築物は、創立当時の建物を基調として、ニューイングランド・コロニアル様式、ゴシック様式から現代様式まで、さまざまな建築様式が不思議と調和し、訪れる人々の目を楽しませてくれます。

イエール大学には、世界中から集めた1,200万冊を超える蔵書および公文書、録音資料、地図、工芸品などの所蔵品があります。それらの目録は集中管理され、蔵書は40を超える施設に保管されています。学内には図書館と呼ばれる施設は約20あり、その中にはクリントン元大統領がヒラリー夫人と親しくなったといわれる法律図書館があります。音楽図書館ではクラシック音楽、ジャズ、アメリカンミュージカルなどの楽譜や録音資料などが収められています。また、医学部図書館には100年以上も前の医療道具などのユニークな展示が見られます。さらに、イサム・ノグチが設計した庭園を有するバイネッキ稀覯手稿図書館など、さまざまな分野の図書館が点在しています。

特に、キャンパスのほぼ中心に位置するスターリング記念図書館は、大学の半数以上の蔵書を保管している、大学を代表する図書館です。卒業生である法律家スターリングの寄付をもとに1930年にオープンしたこの図書館は、荘厳なゴシ

ック様式で、ヨーロッパの大聖堂を模した建物です。入口の重い木の扉を開けると、高い天井や屋内を飾るステンドグラスや彫刻に圧倒されます。また、回廊には所蔵品の一部が企画展示されていて、石板に刻まれた楔形文字や地図コレクションの一部など、歴史に思いをはせることができるものが数多くあります。回廊の柱には、本を読みながら居眠りをしている人などのユーモラスな石の彫刻があり、和やかな気分させてくれます。館内は7階建ての閲覧室と15層の書庫で構成されており、レファレンス、コンピュータ索引、ワイヤレスインターネット、ATMなども完備されています。貸出冊数と貸出期間は、利用する学内図書館の種類や利用者の身分によって異なりますが、スターリング記念図書館では、大学研究員の配偶者である私の場合、一度に10冊以上を約1ヶ月間借りることができます。貸出期限が近づくと、そのお知らせのEメールが届きます。私は書庫に入って気ままに小説や随筆を探ることが多いのですが、質問をすればスタッフが丁寧に答えてくれます。私にとってうれしい驚きだったのは、学生や教員だけでなく、研究者の配偶者という立場の私でも図書を借りることができるということでした。特に、書庫にも入れるということも知り、大学の一員として自分が受け入れられていることに感激しました。書庫に入る時は、貸出カードも兼ねている、大学から発行された運転免許証サイ

ズの写真付IDの提示が必要です。一方、中庭や回廊、世界中の新聞が集まる新聞閲覧室などは一般に公開されています。新聞閲覧室では大きなテーブルと椅子に加えて、フットレスト付のソファも備えられているので、ゆったりと足を伸ばして日経新聞や朝日新聞を読むことができます。

イエール大学図書館にある日本の書籍や資料のコレクションの基礎を築いたのは、イエール大学名誉教授としてその生涯をニューヘイブンで終えた歴史家、朝河貫一博士(1873-1948)です。朝河氏は、アメリカで東洋研究の中心的な役割を果たす図書館をつくりたいという意志のもとに、当大学で歴史学の研究を続けながら、イエール大学図書館東アジアコレクション部長として尽力しました。朝河氏が図書館の仕事に初めて関わりを持ったのは1900年、スターリング記念図書館が建設されるよりも前のことで、当時イエール大学の院生だった朝河氏が、たったひとりではこりにまみれた和漢書籍の整理をしたことがきっかけです。その後、日露戦争における日本弁護のために、1904年から1906年にかけて朝河氏が活発に講演や著述による活動をしたことはよく知られています。そして1906年から1年半、朝河氏はイエール大学と米国議会図書館の要請を受けて日本に戻り、日本文化史の諸方面にわたる史料や文学を収集します。その際、数百巻の現代日本情勢に関する資料(教育、法律、外交史、

経済、地理、地質学関係)と1,700余の地図が、主に日本政府の省庁から寄贈されたそうです。その後の約40年間、朝河氏はイエール大学図書館東アジアコレクション部長としてその任務を全うしました。秘書もタイプライターもなく朝河氏がひとりではじめた仕事は、現在は数人の司書を中心に多くのスタッフによって行われています。朝河氏の収集した書籍は、もちろん現在も大学図書館でも閲覧可能で、朝河氏の遺した日記、原稿、書簡なども、朝河文書(Kan ichi Asakawa Papers)として大学図書館に保管されています。

現在、スターリング記念図書館と地下通路を通じて隣接しているクロスキャンパス図書館は大改修中です。2007年秋に新入生を迎える頃には、重厚なスターリング記念図書館とは対照的な、明るく開放的なラーニングセンターに生まれかわるそうです。

伝統を尊重しつつ、時代にあった学習環境を模索して進化を続けているキャンパス。熱心に勉強する学生たちや、最適な学習場所を提供する努力を惜しまないスタッフ、それらを包むキャンパス全体が「学問のサンクチュアリ」であるという雰囲気満ちているように感じます。

参考文献等：

- 『朝河貫一書簡集』朝河貫一書簡編集委員 早稲田大学出版部 1990年
『朝河貫一の世界』朝河貫一研究会 早稲田大学出版部 1993年
『朝河貫一 人・学問・思想』井出孫六他 北樹出版 1995年

イエール大学図書館
www.library.yale.edu
イエール大学
www.yale.edu

(本学卒業生)

単純作業に耐えられますか？ 蔵書点検アルバイト体験記

面接での質問

「退屈で一本調子の単純作業に耐えられますか？かなり辛いですよ？」と念を押され、どんなにひどい仕事なんだと想像がつかないながらも「大学の図書館の仕事だから危険はないだろうし、阿漕な商売を手伝うこともないから」という単純な読みで快諾したものの、図書館で顔色ひとつ変えず黙々と職務をこなす司書さんたちを見るにつけ、一抹以上の不安がよぎった。この人たちに囲まれて、私は1週間やって行けるのだろうか？「図書館内ではお静かに願います」と休館日の作業中にも言われるのだろうか？精神的に過酷な労働が容易に想像され、妄想は膨らむ一方だった。

ところがどっこい、蓋を開けてみれば何のことはない。何を隠そう面白いのは外大の司書さんたちである。おっしゃるとおり作業は一本調子の単純作業だが、彼らが合間に繰り出す、豊富な読書量に裏打ちされた話はかなり面白く、懸念された単純作業を逆にありがたく思ったほどだ。

図書の並べ替え

作業は 1.図書の並べ替えと 2.バーコードスキャンの二つに分けられる。いずれも図書館閲覧室にある全ての本に対して行う作業で、文庫から図鑑、辞書の類

にいたるまで全ての図書に対して行った。

最初の作業では、人間の目と手で地道に本の背表紙の下方にある請求記号ラベルという青字三段柵のシールに記載されている番号に従って本を並べる。一番単純な作業のはずなのだが、意外とこれが難しい。本をまっすぐに立たせるのが至難の業で、「絶対、特殊技能を要するはずだ」と言い切りたくなるほどである。考えてみてください、年季の入ったあの外大の辞書のような柔らかい本を起立させようと思ったらどうでしょう。気の長いはずの私が何度書架をひっくり返してやろうかと思ったことか。月例の蔵書点検後の美しい本の並びには、ある程度の几帳面さと大胆さ、そして忍耐力が求められるに違いない。



図書の並べ替え

何百冊という単位で順番に並べるので番号の読み間違いを起こしやすい。思わぬところに畑違いの本が出現したりする。司書さんは、さすがによくしたもので、「この本がここにあってはならない」とカテゴリー認識をされていてバンバンと並べ替えていく。その様子を見て、図書

館で閲覧した数冊の本を苦勞して書棚に戻した経験のある私は、次回から遠慮なく棚の横にある「閲覧室資料返却台」に返却してプロの目と感覚に任せようと誓った。実際、日本的発想をすれば、「自分で出した物は責任をもって元に戻さなければならぬ」と思うが、私たちが番号を見て元に戻す労力と正確性を考えると、プロにお任せするのが合理的である。「お任せください」と司書さんの力強いお言葉に素直に従おうではありませんか。

バーコードスキャン

機械を導入している割には、という感の拭えない物であった。4台の読み取り機（パソコンとハンドスキャナー）を駆使し、半日で書架一列半のペースで読み進んで行く。びっくりするぐらいのスピードの原因は、まさにこの機械にある。二人一組でバーコードを10冊ずつ読み取る作業を行うのだが、実際スキャナーで読み取る時間よりもデータ転送の処理時間の方が長く、後者が作業の4割を占めていたのではないだろうか。4台それぞれが、「ピッ」と快調に読み取り音を響き渡らせ、仕事が進んでいる快感を味わうも、「しーん」と休館日の図書館に静寂が襲ってくる。

このときほど人間の偉大さを感じたことはなかった。他の台の待機時間中に読み取り作業を進めれば、データ転送による渋滞も緩和されるだろうと考え、スキャンのタイミングをずらしたり、他チー

ムの休憩時間に作業を進め、忙しく作業を進めている音を聞きながら休憩を取るなどの工夫が各チームで見られた。こういうマイナーな工夫こそが優秀な機械に勝る人間の素晴らしいところである。そして、この一見くだらないような工夫を生かせるおらかな環境。なんと理想的な職場でしょう。何でもっと早くこのバイトをしなかったのだろうかと悔やまれてならない。



バーコードスキャン

しかし、良いことづくめではないのが世の慣わしで、辞書や図鑑に当たると重くて本を支えることができず、かなりの重労働である。一方、文庫本のように小さくて軽い物は延々と続き、目が回りそうになる。決められた時間内に割り当てられた分量をこなさなければならないので、マイペースを謳歌することは不可能で、ある程度の日本的勤勉性が要求された。中には私がバーコードリーダーに読ませる2倍のスピードで「ピピッ」と読み取り音を響かせるつわものが登場し舌を巻いた。そのスピードに競って見たものの一向追いつかない。一体どんな技を使っているのだろうか？手が余分はないと不可能である。確かそんな同僚はいなかったはずだが...

また、意外な発見もあった。本はひょんなところから現われる。例えば、全集の陰に隠れていたり、下敷きになって横たわっていたり意外にかくれんぼうがうまい。圧巻は、別の本を着込んで、表面上1冊の本を演じ、実は2冊だったという。つまり表から見ると変哲もない本が別の本をくわえ込んでしまっているのである、そして中の本は忘れ去られているわけである。そんな行方不明のかわいそうな本を救出する目的もあって蔵書検索は地道に行われているようだ。

図書館で、本を枕にしている方に警告。意外と本は汚れていますよ。埃で手が真っ黒になりました。しかし、その類の本は不思議と眠気を誘うんですよね。

嬉しい誤算

1件1件しらみつぶしに図書情報をスキャンすると、自分の担当した書籍のタイトルはすべて確認したことになる。この作業のおかげで、忘却の彼方に行ってしまった、読みたかった本のタイトルがよみがえってきたり、検索で見つからなかった有名本の存在を発見したりして感激した。つまり、レポートや論文を書いたりする流れで参考文献を当たると、高頻度で引用されている本に出会うが、OPACで検索してもなかなかヒットせずにあきらめたり、忘れたりすることがある。もちろん検索の仕方が悪いのが要因であるが、作業中に目にとまった本を休憩時間に手にとって見たところ、搜索願もし

くは購入希望を出そうかとまで考えていた本だったりした訳だ。

また、意外に蔵書のバラエティーが豊富で驚いた。たまたま使用頻度の高い書架を一部担当したこともあって普段から眺めていた割に見つけられなかった本に出会ったり、一度も近寄ったこともなかった書架で探していた本を発見したり、一目で有効な図書だとわかるものがあつたりして、有意義だったことは言うまでもない。そのこともあって、待機時間も個人的な図書確認作業ができたため、どんなに待ち時間が長くても、時間が足りないほどで、退屈だと感じたことはなかった。さらに、司書さんから関連情報ももらえたことは大きかった。司書さんと仲良くなって有効利用すべし。

振り返って思うこと

今回の作業を通して、個人的に得るものが多く、有益な1週間を過ごすことができた満足している。今からでも司書の資格を取って、図書館で働くのもありかなあと考える始末。しかし、蔵書に気をとられ仕事に集中できず、書庫から帰って来られないような手合いの職員になること間違いないかもしれない。

「単純作業に耐えられますか？」これが妥当な質問だったのかどうか疑わしい。一緒に作業をした他の学生はどう感じているのか興味津々である。

(第2部英米学科4年)



「館内整理」と「蔵書点検」って何？

図書館の入口まで近づいて、閉館しているのに気付いたことはありませんか。そんなとき口をついて出るのはきっと「ああ、図書館休みか」ということばでは？しかし、閉館しているからといって「休んでいる」わけでもないのです。閉館の主な理由、「館内整理」と「蔵書点検」について説明します。

館内整理

毎月第3木曜日に、図書を並べ直す作業を行っています（試験期間中を除く）。図書は請求記号（背表紙の青枠ラベルで表示）の順に並んでいますが、利用がある度に書架から取り出され順序は乱れがちです。所定の位置にないために、探すのに時間がかかることもしばしば。利用頻度の高い分野の書架はなおさらです。正しく並ぶよう日常的に気を配っていますが、なかなかすべてには届きません。そこで、定期的に、動きをとめた状態で「リセット」するのです。

蔵書点検

年に一度、夏季休業中に一定期間閉館して、閲覧室に配架されている図書の所在確認をします。今年は8/11(金)～17(木)に行いました。約7万冊の図書のバーコードを1冊ずつ読み取る作業に、約3日半を費やします。全体の作業手順

は次の通りです。

1) 書架の整理をする

図書を請求記号のとりの位置に並べ直す（上記「館内整理」と同じ）。

2) 書架にある本の所在確認をする

図書に貼ってあるバーコードを読み取る。

3) 行方不明となっているものを抽出する

下記の条件にあてはまらないものが「行方不明」ということになります。

・書架にある図書

（＝作業期間中バーコードを読まれた）

・貸出中の図書

実際は作業ミスなどがないかを確認した上で「行方不明」が確定します。

今年の蔵書点検の結果から、1月から8月までの間に13冊の図書が行方不明になっていることが判りました。これらについては再購入を検討します。また、作業中にみつかった、修繕が必要な図書なども適宜処理されます。

ここまで読めばお分かりいただけと思いますが、「館内整理」も「蔵書点検」も、図書館を快適に使っていただくためには欠かせないプロセスです。ご理解とご協力をお願いします。

（橋本）

「OPAC 質問票」って何？ 「見つからない！」にこたえます

なぜヒットしないのか？

探している資料が OPAC でヒットせずに困ったことはありませんか。ヒットしない原因は大きく二つに分けられます。一つは「もともと外大図書館にない場合」、もう一つは「検索語が適当でない場合」です。

しかし、原因がどちらかは、なかなかわかりにくいものです。「あれ？OPAC でヒットしない。外大図書館にはないのか」と、他の図書館からの資料の取り寄せを申し込んだら(または、購入希望を出したら)、翌日に図書館から「その資料は図書館にあります」と回答が。そんなことはありませんか。

検索語さえ正しければ、その場で入手できたはずが、検索語が適切でないばかりに、手にする機会を遅らせてしまう。そんな残念なケースが図書館ではときどき見られます。

司書がお調べします

このような事態を避けるためにも、OPAC でヒットしない資料があれば、お気軽にカウンターにご相談ください。ヒットしない原因が図書館の蔵書にあるのか、もしくは、検索方法にあるのか、当館司書がお調べします。

ご相談の際には、館内の OPAC 端末に備え付けられている「OPAC 質問票」という

用紙をご利用いただくと便利です。OPAC 質問票には、「探している資料の情報」と「実際に入力した検索語」を記入してください。あらかじめ必要事項を記入していただくことで、カウンターですみやかに回答することができます。

調査の結果、検索語に問題がある場合は、その問題点を明らかにし、適切な検索方法を説明します。今後の検索スキルの向上にお役立てください。

また、資料が外大図書館にない場合は、他の図書館の蔵書の検索方法や入手方法をご案内します。外大にない資料は、他の図書館から図書そのものを取り寄せて借りること(現物貸借)や、文献のコピーを取り寄せること(文献複写)ができます。また、資料を所蔵している図書館への紹介状も発行します。さらに、購入可能な資料は図書館で受け入れます。合わせてご相談ください。

「ある」を「ない」にしないために

毎月の館内整理や蔵書点検で資料が整備されても、検索でうまくいかない、図書館に「ある」資料も「ない」資料になってしまいます。検索で困ったときにはあきらめずにカウンターにお尋ねください。図書館はみなさんの「見つからない！」に答(応)えます。

(飯島)

- 4月1日 図書館長就任 近藤義晴教授 / 組織改編
5日 第3AV教室 CALL システム基本操作説明会
6日 新規データベース導入(4タイトル)
7日 図書館オリエンテーション実施(学部・院)
11日 書庫出納閉鎖時間短縮
12日 第3AV教室 CALL システム応用操作説明会
- 5月22-26日 職場訓練受け入れ(あけぼの学園1名)
25日 日本図書館協会評議員会 1名派遣
31日 e-ラーニングシステムプライベートセミナー 1名派遣
- 6月1-7日 太田辰夫先生文庫 中国古典籍展示会
2-12日 情報セキュリティ研修 基礎コース(e-ラーニング) 3名受講
5-9日 トライやる・ウイーク受け入れ(竜が台中学・井吹台中学各1名)
6日 神戸研究学園都市大学交流推進協議会図書館部会 3名派遣/電子情報セミナー1名派遣
7日 図書館運営委員会 / 情報処理施設等運用委員会
15日-7月2日 情報セキュリティ研修 応用コース(e-ラーニング) 2名受講
17日 京都大学高等教育開発推進センター第72回公開研究会 1名派遣
30日 図書館報第24号発行
- 7月3日 学術情報ソリューションセミナー 1名派遣
3-14日 大学図書館職員長期研修 1名派遣
5-7日 ネットワーク管理担当者研修 1名派遣
6日- 死海写本展示
6日-8月20日 情報セキュリティ研修 上級コース(e-ラーニング) 1名受講
27-28日 公立大学協会図書館協議会研修会 1名派遣
28日 C A L L 実践活用セミナー 1名派遣
28日 神戸大学機関リポジトリ開設記念シンポジウム 1名派遣
- 8月1日-9月29日 一般市民開放
2日 兵庫県大学図書館協議会総会 2名派遣
3日 ジャーナルセミナー2006 1名派遣
6日 オープンキャンパス施設開放・外国語図書展示
11-17日 蔵書点検
18日 オープンキャンパス施設開放・外国語図書展示
25日 著作権セミナー 1名派遣
- 9月14日 「風の便り」専用書架設置(学長紹介図書展示)
15日 電子ジャーナル出版者説明会 1名派遣
19日 REFORM 公開講演会 1名派遣
21-22日 資料電子化研修 1名派遣

編集後記

大学図書館の果たすべき役割の最も重要なものの一つが教育と研究の支援であることは言うまでもないことですが、今号の文章を読んでいて、日頃はあまり意識していないまた別の、図書館のもつ役割に、今更ながらですが思ったりしました。

巻頭言で村上先生は「政治学を学ぶことに少し疲れをおぼえていた私には、至福のひとつときであった」とピアンキ夫人との詩集を介したふれあいの時間を回想しておられますし、岸本さんは家事の合間にイェール大学図書館で日本への思いを満ちす時間を持っていると書かれています。

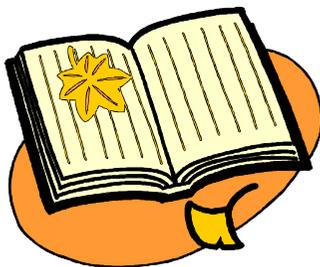
たぶん学生利用者の皆さんも、学習のた

めの図書館利用と平行して、少し柔らかい読み物で、疲れた脳髓をリフレッシュなどされているのではないかと思います。

最近設けた専用書架の、学長が「風の便り」で紹介されている書物がよく読まれているのも、その選択が学問的なものだけでなく、硬軟あわせてなされていることにもよるのではないのでしょうか。

今後も図書館の資料群がトラブル無く利用していただけるよう、蔵書点検などのメンテナンスもしっかりやりながら、教育、研究そして気分転換など様々な要求に応えていきたいと考えています。

編集責任者：図書館事務長 牛原秀治



AD ALTIORA SEMPER No.25 = 神戸市外国語大学図書館報

「AD ALTIORA SEMPER」とはラテン語で「常により高きを求めて」という意味です

編集・発行：神戸市外国語大学図書館

〒651-2187 神戸市西区学園東町9丁目1

TEL: 078-794-8151 / FAX: 078-797-2257

E-MAIL: info@lib.kobe-cufs.ac.jp

URL: <http://www.kobe-cufs.ac.jp/library/>

2006年11月30日発行

発行責任者：図書館長 近藤義晴